

保育者養成課程における「つながりあそび」の実践報告

小笠原 大輔^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

子どもにとって身体接触の経験は大変重要であるが、保育者となる者にとっても当然重要であると考えられることから、授業内で身体接触を多く含む「つながりあそび」を行い、受講生の心理的変容をみるためにコミュニケーション・スキル尺度を用いて実施前後で比較した。その結果、集団による差がみられるものもあるが、全体平均では「自己統制」「表現力」「読解力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の全スキルが有意に上昇した。以上より、「つながりあそび」は楽しいだけに止まらず、他者とのつながりに関して望ましい心理的変容をみせることが明らかになった。

【キーワード】

つながりあそび スキンシップ コミュニケーション

I. はじめに

のみならず「サイレントベビー」に代表される乳児および幼児にも及んでいる。

1. 背景

社会の変化とともに“3間”と呼ばれる「時間」「空間」「仲間」が減少し、子どもの遊び形態が大きな変貌を遂げてしまった。テレビゲームに代表される「目と指先だけを酷使し、全身を思い切り動かすことのない」遊びがメインとなっている子どもも多く存在する。即ち“対人”ではなく“対機械”であり一人遊びである。通信型ゲームは複数名で遊びはするものの結局は“機械経由の対人”であり、直接的なコミュニケーションになってはいない。若者のコミュニケーション能力の低下は一昔前から叫ばれているが、その問題は今や若者

2. スキンシップ

現代の遊びに対し、伝承遊びと呼ばれる昔ながらの遊びは、子ども同士の直接的なかわりあいが必然的に生まれることから、コミュニケーション力の向上にも一役買っていた。その中でも、鬼ごっこやおしくらまんじゅう、かごめかごめ、花一匁、うまとび等のように、身体接触度の非常に高い遊びは、自己および他者の身体を介した直接的なコミュニケーションとなる。乳幼児期にこのような身体接触の豊富な経験をしておくことは非常に重要である。乳児について、「他者に触れることは、もっとも直接的に自分の存在を相手に伝える、原初的な伝達形態といえる。乳児にとって母親から受ける身体接触 (touching) は、世界を

<連絡先>

小笠原 大輔 ogasawara@shohoku.ac.jp

認識する出発点であり、その後の健全な成長の要件である。」¹といわれている。また「母親が生まれたばかりの赤ん坊に授乳するとき、しっかりと赤ん坊を抱いてスキンシップをとることが授乳そのものと同じくらい大切であるという。空腹も満たされると同時に、人肌の温かさを得たいという欲求を満たすわけである。そしてその温かさは物理的なものでもあり、心理的なものでもある。身体接触によって、赤ん坊は自己と外界の世界がわかるようになり、安心感を持つようになる。このように赤ん坊が母親の身体に接触するという本能的な接触でなくても、儀礼として握手するときや肩をポンとたたいたりするときにも、身体接触によって安心感を得ていると考えられる」²と説明されている。さらに山口(2004)によると、タッチケアの効果として、赤ん坊の社会性が高まり、認知・適応能力も高まったり、寝つきや夜泣きの改善、便秘の解消などの「身体の健康への効果」、情緒の安定や感情表出の活性化などの「心理的健康への効果」、アタッチメント(愛情)の形成など「母子関係の効果」などなど、多方面にわたる効果も確認されている³。同様に幼児においても、「母親とのスキンシップが多かった子どもは自分に自信を持ち、他人のことを信頼して親しくなることが容易になり、また、父親とのスキンシップが豊富であった子(※本文では子ではなく「学生の回答から」とある)は、人と強調して何かをしていく能力が伸ばされる傾向がうかがえた」といった報告⁴や、「幼児期における両親との接触の程度が高い人は、接触に対して親しみの感じと励ましの感じをより高く感じた」といった報告⁵などがある。

以上のように、身体感覚・皮膚感覚というのは豊かな心を育むためには不可欠⁶であるが、スキンシップ不足に対して、必ずしも実の親でなくても、友達や他の大人と触れ合う体験ができれば、その欲求は満たされ、解決される⁷ことから、子ども

のこの欲求を満たすことのできる直近の大人として保育者の果たすべき役割は大きい。またそれは幼児期だけではなく、成人してからでも効果を発揮することがある⁸ことから、保育者養成校に在籍している間に、スキンシップの経験を少しでも多く積み、その楽しさや心地よさ、重要性を身をもって知っておくことが大切であると考えられる。

II. 方法

1. 対象

短期大学保育学科2年生124名(うち男子2名)

2. 対象授業及び調査時期

資格必修科目「健康の指導」(隔週通年全15回)の1コマ内(平成27年7月)で行った。

3. 調査手順

4つのクラス毎に「つながりあそび」を行い(※実施内容は結果とともに後ほど記す)、実施前および実施後に選択肢によるアンケート調査を行った。アンケート調査には「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs」(藤本・大坊2007)⁹を用いた。採点は「かなり得意」7点、「得意」6点、「やや得意」5点、「ふつう」4点、「やや苦手」3点、「苦手」2点、「かなり苦手」1点として、6つの下位尺度ごとに得点を加算し、項目数(4)で除して尺度得点を算出した。

統計的解析にはJavaScript - STAR2012を用いた。尚、本研究は探索発見・改善研究に該当するため、有意水準は片側検定10%未満とした¹⁰。

Ⅲ. 結果および考察

1. 「つながりあそび」の内容・方法と受講者の様子

① 車座足裏揉み

《方法》車座になって胡坐の姿勢をとる。右隣の者の左大腿の上に自分の右脚を乗せ、足裏を揉んでもらう。同時に、自分の左大腿の上にある左隣の者の足裏を揉みほぐす。しばらくしたら左右チェンジする。

《受講者の様子》痛い、くすぐったい、気持ちがいい、など十人十色の反応をみせた。揉まれる立場としては右足と左足とで感覚が違うことに気づき、揉む立場としては左右両隣で足裏の持ち主が替わるので人の足（裏）の個人差に気づく者が多かった。

② ペア・ストレッチ

【開脚】

《方法》向かい合わせで開脚して座り、お互い手を繋いで交互に20秒程度引き合う（図1）。手を引っ張ってもらうとともに、自らも前方に上体を倒していく。次にそのまま互いに右側に上体を倒し、主に左腕で相手の背中下部～腰を押さえ、相手が上体を前方に倒しやすくなるよう支持する（図2-a、b）。左側も同様に行う。

《受講者の様子》ある程度柔軟性に富む者にとっては大変気持ちのよい姿勢である。そうではない者にとっては、互いにこの姿勢をとることすらできず、引っ張られた際には苦痛に顔を歪めることになるが、その状況にお互い「きついけど、笑ってしまう」様子が多くみられた。また、次の姿勢（図2-a、b）では、相手の背中はおろか、つま先にすら手が届かないペアもあったが、なんとか相手の体に触れようとチャレンジしていた。



図1 開脚その1



図2-a 開脚その2



図2-b 開脚その2



図3 捻じり上げ



図4 胸開き



図5 背中のせ&回し



図6 体側伸ばし



図7 肩持って伸ばす&捻じる

【捻じり上げ】図3

《方法》前述姿勢のまま、左手を背後の床につく。右腕を斜め上に引っ張り上げるように拳上し、全身を捻じり上げる。この時、両脚は左右ではなく前後開脚になる。そのまま、左肩越しに自分の右の踵を見るようにすると、さらに捻じりが増し、螺旋状に伸びて気持ちが良い。右も同様に行う。

《受講者の様子》慣れない姿勢により方向感覚を失い、左右が混乱する者がいた。尻を床から浮かすことの出来ない者もいたが、互いに相談しながら試行錯誤している姿がみられた。

【胸開き】図4

《方法》一方は胡坐をして、両手を頭の後ろでしっかりと組む。パートナーは自分の両腕を相手の頭と腕で作られた隙間に前から入れ込み、肩甲骨あたりに手の平を添える。そのまま膝を曲げていきながら、手の平で相手の背中を押していく。※パートナーが痛がっていないか注意しながら行う。特に肩関節の脱臼歴のあるものは要注意である。

《受講者の様子》スマートフォンの長時間使用などにより慢性的に猫背の状態が多いためか、「気持ちいい」「スッキリする」「姿勢が良くなる」といった声が相次いだ。

【背中乗せ&回し】図5

《方法》二人とも背中合わせに立ち、両腕を拳上する。一方がパートナーの手首を掴み、前屈しながら背中に乗せる。この際、相手の体重をしっかりと自分の背中で支えられるようにするために自分の尻を相手の尻よりも低い位置にしてから持ち上げなくてはならない。安定したら掴んでいた手を放し、そのまま軽く浅く膝の屈伸を繰り返して小刻みに振動を与える。次に振動は

止め、そのままパートナーを落とさないように注意しながら時計回りに一周する。

《受講者の様子》これも大変気持ちのよいストレッチであり、お馴染みのストレッチでもある。しかし、手を放すことには慣れていないためか「キャー!」という悲鳴と笑い声が多発した。更にそのまま回転するとなった際には、その悲鳴も笑い声も大きさを増した。定番のペア・ストレッチとスリルのある遊びの組み合わせである。

【体側伸ばし】図6

《方法》これもお馴染みのペア・ストレッチではあるが、互い違いに表裏になることで、前屈みになることを防ぎ、より体側が伸びやすく、また肩のストレッチにもなる。「上の腕は耳よりも後ろ」「顎を引いて覗き込むように少し顔を前に出す」と声掛けすると、更に伸びてよい。逆側を行う際は互いに手は離さずに、ひっくり返るようにすると少し楽しい。

《受講者の様子》繋ぐ手を左右間違えて、本来顔よりも上になるはずの腕がクロスして下になってしまうペアが多数あった。「あれ?何か違うぞ」と、どちらかが気づき、笑いがこぼれるシーンが多かった。

【肩持って伸ばす&捻じる】図7

《方法》これも定番のペア・ストレッチである。肩、背中、腰が適度に伸びて気持ちが良い。この状態から更に壁を見るように上体を捻じる。

《受講者の様子》捻じりに移ったところで、「あああ〜」などの声が漏れ、ストレッチが効いている様子が伝わってきた。

【脚くぐり】図8

《方法》お互い向かい合って立ち、両手を繋ぐ。



図8 脚くぐり

向かって同側の脚で腕の外側から跨ぎ、内側に入れて着地する。反対側の腕を頭上より回して背中合わせになる。先ほどと逆側の脚を抜いて元の形に戻る。

《受講者の様子》脚を腕の間に入れられなかったり、脚と腕が絡まったり、転倒したりと、頭では理解していると思うように動くことができず、思わず笑ってしまう様子が多くみられた。初めて上手に出来た時は相当嬉しく、達成感が得られるようである。※怪我などにより肩に違和感のある者は行わない方がよい。

③ 目隠し歩き

《方法》横に並び片手を繋ぐ。一方が目を閉じ、もう一方は目を開けたまま、歩き回る。複数のペアが狭い空間を歩き回るため、目を開けている方はパートナーに危険が生じないように、十分注意しながら誘導する。視覚以外の感覚を研ぎ澄ますために、無言で落ち着いて行うのがポイントである。しばらく行った後に、役割を交替する。次の展開として、他のペアに近づいた際に、目を開けている者同士でアイコンタクトを行い、パートナーをチェンジする。目を閉じている者は今度は誰が自分を誘導してくれているのか分からぬまま（それでも、手の大きさや温かさ、湿り具合、肉感などの手触りから、また誘導の仕方などから、推測したりする楽しさもある）、次々とチェンジを繰り返す。終わりは対面して静止し、全ペア同時に「せーの」で目を開く。再度、役割を交替して行う。

《受講者の様子》無言で行う約束があるにもかかわらず、やはり目を閉じることの不安感と恐怖感からか、はじめのうちはつい叫び声や悲鳴を上げてしまう者もいたが、時間が経つにつれ相手に対する信頼が増し、また集中も高まり、無言で静かに行えるようになった。目を開けた際

の安堵感から、また緊張から緩和への転換により目を開けた瞬間に全員が声をあげて笑った。パートナーを次々とチェンジしていく回では、自分が誰かを悟られないようにするためか、最初から無言でかなり静かに行っていた。終わりの際に目を開けて相手の顔を確認したとたん、チェンジしない回よりも更に大きな笑い声になった。「あ。この人だったのか」という意外性や納得によるものと思われる。目を閉じている最中、「自分を誘導してくれているのが誰なのか、なんとなく分かった」という者も少なからずいた。

④ 『重なる』図9

《方法》一方はうつ伏せに寝る。パートナーはその上に体全体で、相手が痛くないように仰向けに重なるように寝る^註。1)しばらくそのまま。2)下の者が大きく深呼吸する。3)下の者が低い声を出す。次に高い声を出す。4)下の者が小刻みに笑う。

《受講者の様子》「えー。重いから絶対ムリ!」といった声が多く聞かれた。恐る恐る乗ってみると、パートナーから「全然重くないよ」と言われ、安心して身を任すことができた。1)「あったかい」「気もちいい」といった声が多く聞かれ、心地よい態勢であることがうかがえた。ある程度の圧力によりマッサージや指圧等のような身



図9 重なる

体的気持ちよさが得られるし、ある程度重い掛け布団の方が眠りやすい例もあるように、軽く締め付けられている方がよく眠れ¹¹たりするといった精神的な気持ちよさが得られる。2) 下の者が大きく深呼吸すると、上の者が大きく上下動する。これに感動し「すごい」の声があちらこちらから連発された。3) 下の者が低い声を長く出すと振動が上の者まで響いて伝わり、ここでも驚きの声が多発した。逆に高い声の時は上の者は特に何も感じず、笑っているだけであった。4) 下の者が小刻みに笑うと、上の者は小刻みに上下動し、笑い声が最大になった。役割を交替して同じことを行ったが、やはり最初に相手に乗る時だけは自分の体重を気にして慎重になっていた。



図10 握ってだあれ？

⑤『握ってだあれ？』 図10

〈方法〉6～8人程度で行う。まず初めに親を決め、親は目を閉じる。残りの者の中から一人だけ親と握手をする（これを子とする）。親は目を閉じたまま両手でしっかり子の手を握り、感触を確かめる。その後、子は手を離し、その場から離れる。残りの者全員で「もういいよ」と合図を出したら、親は一人ずつと握手をし、先ほど握った子を当てるとい遊び。

〈受講生の様子〉かなり高い確率で正解する。先述の③目隠し歩きで感じた時と同様に、手の大きさや温かさ、湿り具合、肉感などの手触りから判断し、迷うことなく当てられていることが多かった。



図11 金魚運動

⑥ からだほぐし

【金魚運動】 図11

〈方法〉一方は仰向けに寝て、楽な姿勢をとる。パートナーは足側に位置し、両踵～アキレス腱付近を包み込むように持ち、少しだけ床から離



図12 おしり振り子

すように持ち上げる。そのまま、左右に小刻みに揺らす。寝ている者がリラックスしていて、適度な振動が与えられると、その振動は頭まで伝わり左右に振れるが、振幅が大きすぎると揺れは伝わりにくく、また寝ている者にとって心地よい揺れではなくなってしまう。また寝ている者の両脚がバラバラに離れてしまうと揺れが相殺されてしまい、頭まで届かなくなるので「二

本の脚を一本にまとめて揺らす」との声掛けが必要であった。

《受講者の様子》振幅の調整に多少時間のかかるペアもあったが、しばらくするとコツが掴めてきて、寝ている者は皆快適な様子であった。「交替」の指示を出した際には「えー。もっとやってほしい。」と多くの者が口にしていた。それほど気持ちのよい動きであることがわかる。

【おしり振り子】図12

《方法》一方は仰向けに寝て、楽な姿勢をとる。パートナーは相手の両足首辺りをしっかり掴み、尻が床から少し離れる程度に持ち上げる。両脚が垂直になるようするとよい。寝ている者の尻が振り子のように左右に揺れるように、両足首を掴んだまま自分自身身体ごと左右に揺れるように動く。ちょうどよい振幅で行うと頭まで揺れが伝わる。寝ている者は腰回りが楽になる。

※脚を下ろす時は、腰を傷めぬよう必ず両膝を屈曲させてから床に置く。

《受講者の様子》金魚運動と同様に、寝ている側は大変気持ちが良い、リラックスできる。

【股関節ほぐし】図13

《方法》一方は仰向けに寝て、楽な姿勢をとる。パートナーは相手の両足首を持ち、自分の片方の足の甲を相手の膝の裏に当てる。そのまま寝ている者の膝が胸に届くくらいまで足の甲で押し込む。相手の膝が外回りに一周してくるようにして、元の位置に戻す。左右交互に数回行う。

《受講者の様子》これも前述の運動と同様、大変気持ちのよい運動である。慣れるまでは上手に回せず戸惑っている者も多かったが、コツを掴めると次第に双方無理なく動けるようになっていた。



図13 股関節ほぐし



図14 腕ぶらぶら

【腕ぶらぶら】図14

《方法》一方は仰向けに寝て、楽な姿勢をとる。パートナーは相手の手を掴み（親指と小指を掴むとよい）、同側の肩甲骨が床から少し離れるくらい垂直に持ち上げ、そのまま小刻みに揺らす。前腕を回内させてしまうと肩～頸が詰まった感じになってしまうため気をつける。腕を下ろす時は少し引っ張りながら丁寧に下ろす。

《受講者の様子》これも前述の運動と同様、大変気持ちのよい運動である。「肩がスッキリする」との感想が多かった。

2. コミュニケーション・スキル尺度

ENDCOREsの実施前後比較

実施前のグループ間に得点の有意差が認められた下位スキルがいくつかあったため、グループ別に結果をまとめた。しかしながら、グループの特徴や差異を具体的に見出すことは本研究を行うにあたり無意味であることから、グループ間比較は、分散分析により有意差の有無のみ検定を行い、多重比較検定は敢えて行わないものとした。また、クラスの特定を防ぐために、a、b、c、dの4つのクラスとA、B、C、Dの4つのグループ名は同じアルファベット同士で対応せぬようシャッフルした。

①「自己統制」図15

実施前でグループ間に有意な差が認められたことから、「自己統制」スキルはグループにより差があることがわかる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差が認められた。また実施前後間ではA、B、Dグループにおいて有意な差が認められたことから、「自己統制」スキルが上昇したといえる(A: $4.58 \pm 1.13 \rightarrow 4.83 \pm 1.02$, B: $4.30 \pm 0.99 \rightarrow 4.54 \pm 0.89$, D: $4.85 \pm 1.11 \rightarrow 4.98 \pm 1.00$)。

②「表現力」図16

実施前ではグループ間に有意な差は認められなかったことから、「表現力」スキルに関してはグループによる差はないといえる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差は認められず、全グループに上昇傾向がみられたが、とりわけA、B、Dグループにおいて実施後に有意な上昇が認められた(A: $3.99 \pm 1.14 \rightarrow 4.54 \pm 1.08$, B: $3.95 \pm 1.07 \rightarrow 4.08 \pm 0.92$, D: $4.23 \pm 0.99 \rightarrow 4.57 \pm 1.00$)。

③「読解力」図17

実施前でグループ間に有意な差が認められたこ

とから、「読解力」スキルはグループにより差があることがわかる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差が認められた。また全グループにおいて、実施後に有意な上昇が認められた(A: $4.80 \pm 0.90 \rightarrow 5.05 \pm 0.98$, B: $4.43 \pm 0.92 \rightarrow 4.55 \pm 0.93$, C: $4.38 \pm 0.96 \rightarrow 4.58 \pm 0.96$, D: $5.03 \pm 0.80 \rightarrow 5.15 \pm 0.83$)。

④「自己主張」図18

実施前ではグループ間に有意な差は認められなかったことから、「自己主張」スキルに関してはグループによる差はないといえる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差は認められず、全グループに上昇傾向がみられた。また全グループにおいて、実施前後間で有意な上昇が認められた(A: $3.80 \pm 1.02 \rightarrow 4.38 \pm 1.09$, B: $3.81 \pm 0.84 \rightarrow 3.93 \pm 0.84$, C: $3.76 \pm 0.96 \rightarrow 3.91 \pm 0.98$, D: $3.85 \pm 1.04 \rightarrow 4.13 \pm 1.11$)。

⑤「他者受容」図19

実施前ではグループ間に有意な差は認められなかったことから、「他者受容」スキルに関してはグループによる差はないといえる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差は認められなかった。またA、Dグループにおいて、実施後に有意な上昇が認められた(A: $5.05 \pm 0.95 \rightarrow 5.23 \pm 0.97$, D: $5.17 \pm 0.83 \rightarrow 5.30 \pm 0.87$)。

⑥「関係調整」図20

実施前でグループ間に有意な差が認められたことから、「関係調整」スキルはグループにより差があることがわかる。同様に実施後においてもグループ間に有意な差が認められた。またB、Dグループにおいて、実施後に有意な上昇が認められた(B: $4.40 \pm 0.86 \rightarrow 4.52 \pm 0.75$, D: $4.94 \pm 1.07 \rightarrow 5.08 \pm 1.01$)。

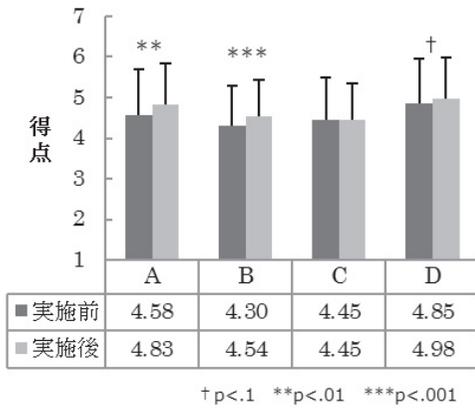


図 15 自己統制スキル

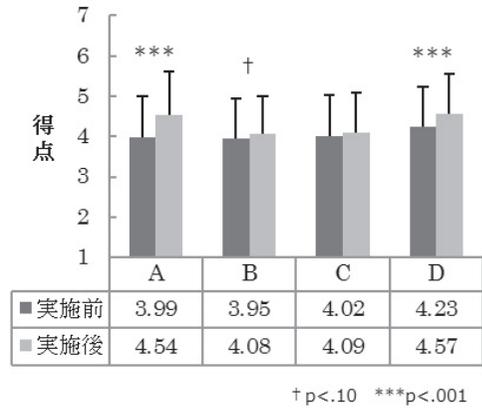


図 16 表現カスキル

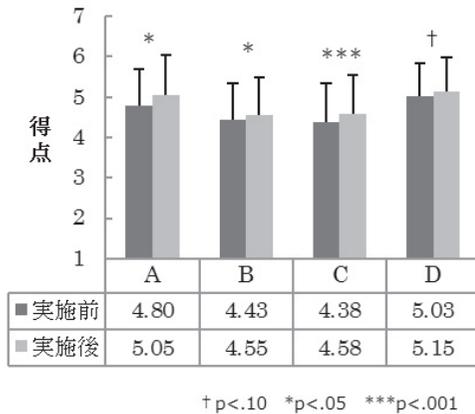


図 17 読解カスキル

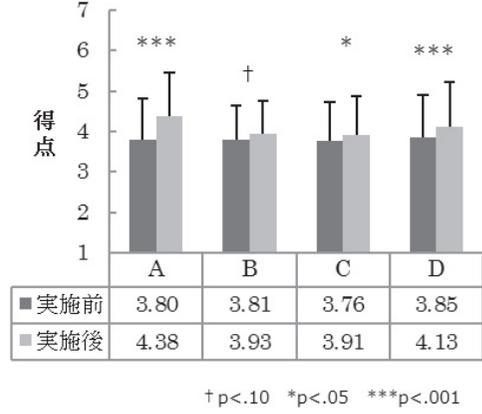


図 18 自己主張スキル

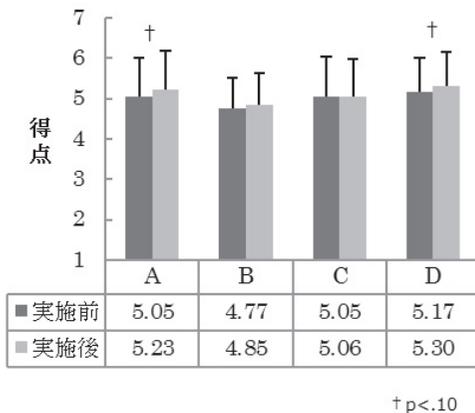


図 19 他者受容スキル

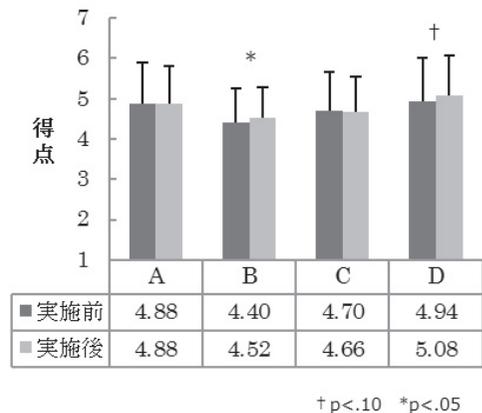


図 20 関係調整スキル

以上の結果を簡潔にまとめると表1のようになる。下位スキルではグループによる差がみられるものもあるが、全グループにおいて概ね実施後に得点上昇傾向がみられた。また、全受講者の平均から実施前後の差を比較してみても(図21)、「自己統制」(4.54 ± 0.72 → 4.70 ± 0.72)「表現力」(4.05 ± 0.79 → 4.31 ± 0.82)「読解力」(4.65 ± 0.78 → 4.82 ± 0.86)「自己主張」(3.80 ± 0.77 → 4.08 ± 0.86)は1%もしくは0.1%水準で有意な上昇が認められ、「他者受容」(5.01 ± 0.75 → 5.10 ± 0.80)「関係調整」(4.72 ± 0.76 → 4.78 ± 0.74)は10%水準で有意な上昇が認められた。従って、90分単発の「つながりあそび」でも、これらのコミュニケーション・スキルの向上が期待できるといえる。

3. 下位スキル間の比較

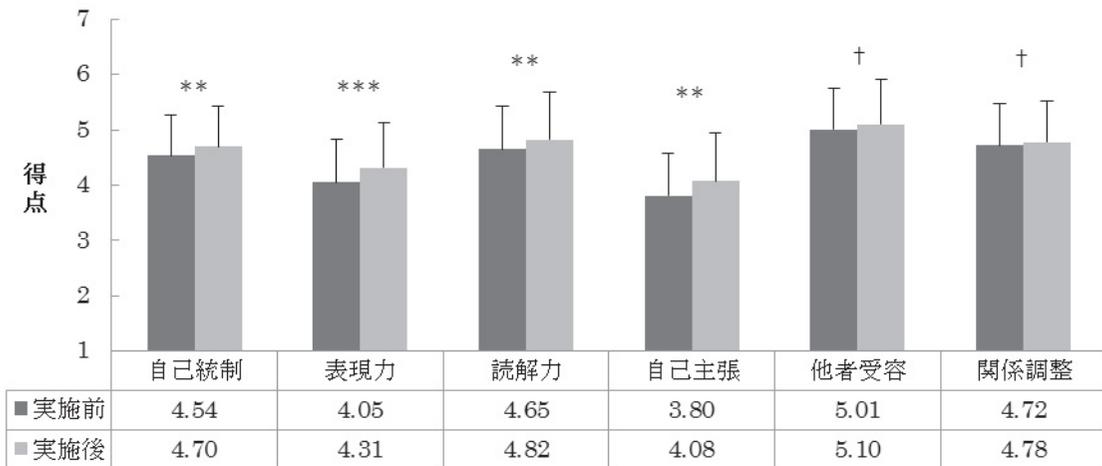
下位スキル間で比較をしてみると、実施前および実施後ともにスキル間に有意差が認められ、実施前後とも「表現力」「自己主張」が他スキルと比べて有意に低い得点であった(図22)。下位スキル間には、「表現力」と「自己主張」は表出系、「読

表1 各下位スキルにおけるグループ間有意差の有無とグループ別実施前後間有意差の有無

	グループ間有意差		実施前後間で有意差 (※いずれも得点上昇)			
	前	後	A	B	C	D
自己統制	○	○	○	○	-	○
表現力	-	-	○	○	-	○
読解力	○	○	○	○	○	○
自己主張	-	-	○	○	○	○
他者受容	-	-	○	-	-	○
関係調整	○	○	-	○	-	○

○：有意差あり -：有意差なし

解力」と「他者受容」は反応系、「自己統制」と「関係調整」は管理系といったように対象となるスキルの類似性を示す系列性が仮定されている¹²。従って今回の結果から、表出系が他系列と比して低いことが示唆された。



† p<.10 **p<.01 ***p<.001

図21 全平均

(n=124)

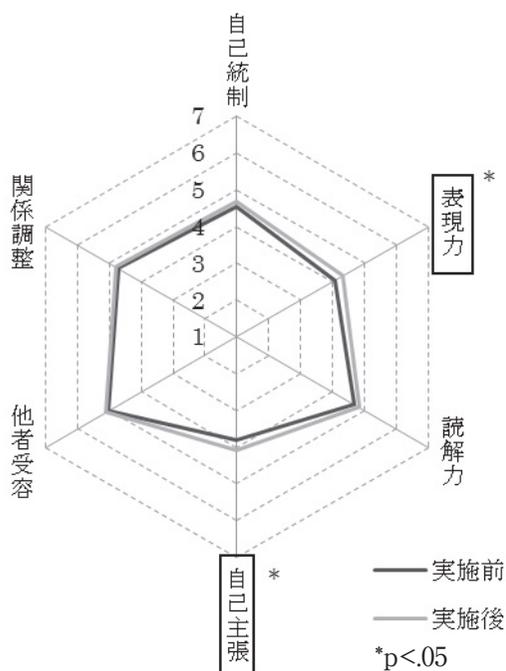


図 22 下位スキル比較

IV. まとめ

スキンシップは乳幼児にとって必要不可欠であり、彼らと深くかかわる保育者にとって、楽しさ・心地よさ・大切さを身をもって経験しておくことは必須であると考え、「つながりあそび」を行い、心理的変容の様子を観察したところ、コミュニケーション・スキルの向上が示唆された。もちろん一回90分の授業前後での比較であることから、一過性の変容に過ぎないかもしれない。しかしながら、荒井(2010)のいうように「1回の運動セッションにおいて、より多くの恩恵が獲得できれば、次のセッションへの参加につながり、結果として、運動の継続につながるものと予想される」¹³ことから、今回のつながりあそびで、純粋に楽しい思いや居心地のよさ、人のあたたかさなどに触れ、実感したことにより、今後の遊びや日常生活の中

でのスキンシップの増加に繋がることが期待できる。本論文では割愛したが、毎回授業後に提出する受講者のリアクション・ペーパーではほぼ全員が「楽しかった」「気持ちがいい」「またやりたい」といった肯定的な感想を記していた。そして、結果的にコミュニケーション・スキルの向上が心理測定尺度により示唆された。

保育の場において「表現」とは主に身体表現や音楽表現、造形表現、言語表現などから成り、幼児の活動の場ではこれらが単独、あるいは複合された形で表出、具現化される^{14, 15}。特に遊びの中ではこれらが密接に関係しあって現れることが多い。しかし、当然ながらこれらの文化的および芸術的な活動の場においてのみ「表現」が行われるというわけではなく、広く「表現」とは社会生活を送る上で当然現れてくる行為であり、人が生きる上で他者とコミュニケーションをとることとほぼ同義である。「表現力」は保育者の重要な資質の一つであるといわれるが、この表現に関して麻生ら(2010)は「表現をする上で触れあう実習は表現の中核である」¹⁶と言っている。保育の場における表現力とはとかく楽器演奏や歌、造形、踊り表現などの技術に目が行きがちであるが(もちろん必要な技術ではあるが、「必要」ではあって「十分」ではない)、「触れる」ことこそ表現力として最も大切にしなければならない要素であろう。塚崎ら(2004)も「保育者は、入園当初の不安から消極的になっている子どもを、受容的なスキンシップで受け止めることによって、子どもとの信頼関係を築き上げる。その結果、子どもは保育者を安全基地として、他の子どもと積極的に関わられるようになる。(中略)保育者と子どものスキンシップは、『両者の身体が直接繋がっている』ということから、『両者の関係が繋がっている』ということ子どもに実感させるという点で、保育場面において重要な役割を果たしていると言える」¹⁷とい

ている。

今回の対象者は、スキンシップを多く含む「つながりあそび」に対してさほど羞恥心を見せず、かなり好意的に取り組んでいたように筆者の目に映った。他の授業時でも(特に実技系)じゃれあったり、くっついたりしている光景をよく目にすることからも、日常的に他者との距離が近い関係を築けているのであろう。今回のような取り組みをせずとも、自然に子どもたちと積極的に触れ合えると期待できるが、「自分たちが当たり前のようにできていることが、子どもにとって大変貴重で重要なことである」ということに、改めて気づく良い機会になったのではなかろうか。

註

相手の上に乗る時に筆者の想定外の出来事が起こった。筆者は「一人はうつ伏せに寝ます。もう一人は、その上に痛くないように上手に乗ります。一か所に体重が偏ると痛いので全体的に乗りましょう。」という指示を出した。上の者は当然仰向けに寝るだろうと思い、「ただ寝る」としか指示しなかったわけであるが、なんと上の者もうつ伏せで重なるように寝たペアが結構いた。全くの想定外だったので、筆者は驚き、思わず「え？そう寝るの？」と問うと、「何がそんなに不思議なの」といった表情で、きょとんとしていた。保育者を目指す学生の特徴であろうか、他者に対する親密度の高さを象徴する出来事であった。他専攻の学生でもこのようなことが起こるのか、機会があれば確かめてみたい。

参考文献

- ・ 高橋和子 (2004) からだ—気づき学びの人間学— 晃洋書房
- ・ 岡田慎一郎 (2007) 親子で身体いきいき古武術あそび NHK 出版

- ・ 久保 武、進藤貴美子、高橋和子、原田奈名子、三上賀代 (2001)、「からだ」を生きる—身体・感覚・動きをひらく5つの提案— 創文企画
- ・ 小川清美 (2001) 子どもに伝えたい伝承遊び—起源・魅力とその遊び方—

引用文献

- 1 大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝え合うか— サイエンス社 p.47
- 2 末田清子・福田浩子 (2003) コミュニケーション学—その展望と視点— 松柏社 p.159
- 3 山口 創 (2004) 子供の「脳」は肌にある 光文社新書 p.63
- 4 前掲3 pp.50-51
- 5 春木 豊 (2011) 動きが心をつくる—身体心理学への招待— 講談社現代新書 p.147
- 6 前掲3 p.18
- 7 前掲3 p.68
- 8 前掲3 p.69
- 9 堀 洋道 (監修) 吉田富二雄・宮本聡介 (編) (2011) 心理測定尺度集V pp.272-277
- 10 田中 敏 中野 博幸 (2004) 『クイック・データアナリシス』新曜社
- 11 山口 創 (2006) 皮膚感覚の不思議—「皮膚」と「心」の身体心理学 講談社 p.165
- 12 前掲9 pp.272-277
- 13 荒井弘和 (2010) 大学授業に伴う一過性の感情が長期的な感情および運動セルフ・エフィカシーにもたらす効果 体育学研究 55 pp.55-62
- 14 名須川知子 高橋敏之 (2006) 保育内容「表現」論 ミネルヴァ書房 p.2
- 15 高野牧子 小田ひとみ (2003) 線画を題材とした幼児の身体表現 山梨県立女子短期大学紀要 (36) pp.93-99
- 16 麻生和江 村上智美 櫛来 祥 小西寛之 首藤 小和 (2010) 「触れあう」実習について—身体表現の授業実践より—
- 17 塚崎京子 無藤 隆 (2004) 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連—3歳児クラスの観察から— p.49

A practice report on “Play with physical contact” in nursery teacher training course

Daisuke OGASAWARA

[abstract]

It is very important for children to experience the physical contact. Similarly, it is necessary for the students in nursery teacher training course. For this reason, they carried out “play with physical contact”, and their psychological transformations were observed from the comparison before and after this play. As a result, there is also something to be differed by the groups, all the skills of “self-control”, “expressive”, “reading comprehension”, “self-assertion”, “others receiving,” “relationship adjustment” has increased significantly in the overall average .Therefore, it became clear that “Play with physical contact” is very fun, and that some psychological transformations desirable in relationship with others have appeared.

[key words]

play with physical contact, physical contact, communication